

じんごろう松^{まつ}



この日も、ねぐるしい夜だった。

小学校三年生になった太郎は、ふとんの中で考えていた。起きてトイレに行くべきか、朝までがまんするべきか…。

太郎の家のトイレは、外にあるのだ。ぞうりをはいて、電灯のスイッチをおすまで、暗やみを歩いていかなければならないのだ。そんなことを考えているうちに、太郎のダムは、今にも切れそうになっていた。

(こうなったら、あの手でいこう。)

太郎はむくつと起きて、えんがわの戸を開けた。そして、用を足した。いきおいよく庭の岩に当たる音がひびく。

そのとき、せなかの方から、足音が近づいてきた。

「太郎。」

ふり向くと、おばあちゃんだった。

「そんな所でおしっこをまったら、ばちが当たるぞよ。」

「うそだあ。」

「じいちゃんが子どものときに、その上の畑に塚^{つち}があつてな。それにおしっこをかけたら、頭がいたくなつてねこんだことがあつてのう。」

「ぼくがしたのは、ただの岩だよ。」

「じいちゃんのお母さんが、塚にきれいな水をかけておいのりしたら、ずつうは、いつぺんになおつたげな。」

「何で、畑なんかに塚があつたの。」

「むかしな。」

太郎は、えんがわにすわりこんでいた。



「畑の横には、それはそれは大きな松^{まつ}があつてな。子ども四人が手をつないでもとどかないくらいの太さで、えだがぐんとはつてりつばな松じゃった。この辺の人は『じんごろう松』と、よんでおつた。どうしてそうよばれるようになったかというと…」

太郎は、おばあちゃんの話に耳をかたむけた。



——もう四百年も前のこと。おれがこの国の殿様になるんだと、さむらいたちのいくさが始まっていた。

よろい・かぶとで身を包んださむらいたちが大勢、この白山はくさんのふもとの村を通っていく。この辺りでいくさが起こるのではないかと、村人たちは心配し始めた。やはり、いくさは始まった。畑はあらされ、女・子どもはこわくて家にとじこもっている。村人にとっては、一つもないことはない。

はげしいいくさになった。長久手ながくての方の村では、たぐさんのさむらいたちを切った刀を池であらったら、池の水が血の色にそまるほどだった。

いくさがおさまったころ、松の下でけがをしたさむらいが休んでいた。

「おい、あのさむらい、おふれ書きに出ていた、じんごろうっていうやつじゃないか。」

「だったら、どうだっていうんだ。」

「おまえ、知らないのか。じんごろうの首を取った者には、金三十両のほうびが出るらしいぞ。」

この二人は、村人をさそって、休んでいたさむらいをおそうことにした。村人にとつても、さむらいたちにはうらみがあつたので、二人のさそいにつて大勢の村人たちが集まってきた。

「おまえさんは、じんごろうというさむらいかい。」

「さようでござる。」

と言いつつ終わるか終わらないうちに、じんごろうにおそいかかった。



じんごろうは、にげた。にげた。けがをしているさむらいに追いつくのは、むずかしいことではない。ついにはとらえられ、首をはねられてしまった。

そして一年たった。しかし、平和になった村に、わけのわからない病気がはやりだした。高い熱が出て、ついには息を引き取ってしまう。一人、二人と……。大勢の村人がなくなった。

「じんごろうのたたりだ。」

だれかが言いだした。

村人たちは松のそばに塚を作り、じんごろうのめいふくをいのつた。

「人をむやみにせつしよう（ころす）するもんじゃねえ。」

長老のことは、みな、うなずいた。

やがて、やはり病はおさまり、じんごろうの休んでいた松を「じんごろう松」と、村人たちはよぶようになった――。

太郎は、じいちゃんの子どものときはずつうも、じんごろうのたたりだと思った。

最後に、おばあちゃんは、太郎に言った。

「ばあちゃんがわかいときまで、松はそこにあつたんじゃよ。ところが、日本が戦争に負けて物がないうとき、松が売りに出されてなあ。買った人が家の柱にと、切ってしまったんじゃよ。今も残っておったらよかったに。」